

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論 一番外編一:

## TOEICを斬る(前編) ～悪魔のような試験は、誰が生み出したのか～

<http://eetimes.jp/ee/articles/1307/26/news041.html>

2年にわたる米国赴任の前後で、自分の英語力は全く変わっていない。その事実を私に冷酷に突き付けたのが、“TOEIC”でした。あの血も涙もない試験は、いったい誰が生み出したのでしょうか。そして、その中身にどれほどの意味があるのでしょうか。

2013年07月26日 09時59分 更新

[江端智一, EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

この連載を読んでいただいているエンジニアの皆さんで、「TOEIC」をご存じない方はいらっしゃると思いますが、一応説明致しますと、TOEICとは、Test of English for International Communicationの略称で、「国際コミュニケーション英語テスト」のことです。

言うまでもありませんが、「英語に愛されないエンジニア」である私にとって、このTOEICとは悪意と憎悪の対象です。もちろん、私には好きな試験など1つありませんが、憎悪のレベルにまで至っている試験は、このTOEICだけです。

私のこの「TOEIC嫌い」を決定付けたのは、10年前に、米国赴任から帰国した直後に受けた受験の結果でした。「赴任前後でスコアが全く変わっていない」という現実を突き付けられた時です。

バカな! と思いました。

仕事では問題ばかりでしたが、2年間の米国生活の衣食住に必要な会話をこなし、必要なら、青い目の、背の高い、でっかい体格のニーチャンと口論までやってのけた、この私の「英語による国際コミュニケーション力」が、公に否定されたのです。

じゃあ、私が米国赴任の生活で使ってきたあの英語は、コミュニケーションは、何だったのか?



私が使っていたのは、『英語のような何かの音声信号』だったのか？それを気の毒に思った、私の回りの米国人が『一生懸命、その信号の解読を試みってくれた』……。そういうことなのか？



画像はイメージです

「その通り。お前は、他の人には得られない本当に得難いラッキーな2年間もの米国赴任という機会を得ながら、英語コミュニケーションに関して何一つ取得することなく、帰国しただけなのだ」

——「TOEIC」は、冷酷にそう言い放ったのです。

## 終生の敵“TOEIC”

---

こんにちは。江端智一です。

本日は、私の終生の敵“TOEIC”を徹底的に批判……。もとい非難します。

今回は、エンジニアリング視点がスッポリ抜けて、著しく客観性を欠き、論理的に破綻しているかもしれません。たぶん、これまでの連載の中で、最も読みにくい文章になるだろうと思います。先に申し上げておきますが、今回は「諦めてください」。

番外編として、このTOEICについて書かせていただくに至った動機は、この連載も終わりに近づきつつあったからです。

私はムチャを承知の上で、EE Times Japanの担当者の方に、既に自分のホームページで公開している、TOEICに関するコラムの再掲載をお願いしました。

江端:「TOEICめ、ううう！ 貴様、この間の遺恨覚えてるかーッ！（作者注:上記の赴任帰国後のTOEICスコアのこと）くっ！ 放せ！ お放しください、担当者殿！ あの“TOEIC”の野郎に、一太刀たりとも斬りつけずにこの連載が終わったら、私は死んでも死に切れませぬ。武士の、武士の情けでござる」

担当者殿:「江端殿。契約が、契約書がございませぬぞ！」（作者注:本当にあります）



というバトルを経ることもなく、あっさり許可を頂きました。担当者と、EE Times Japan編集部の皆さんに、この場を借りてお礼申し上げます。

□

さて、TOEICに話を戻します。

「TOEIC受験のしおり」には、「TOEICとは、英語によるコミュニケーション能力を正確に測定するための共通尺度として実施される世界共通のテストシステムです」と書かれていました。

かつては、それぞれの企業が、独自の英語検定システムを持っていたようですが、このような制度はほとんどなくなり、現在は、TOEICを社内で実施して社員の英語力の指標としているようです。

TOEICを知らない方もいらっしゃると思いますので、簡単に説明します。

TOEICは、他のテストのように合否を判定するのではなく、スコアという形で結果が示されるテストです。満点は990点で、スコアは一桁まで正確に出されます。

そして、拷問のように、嫌がらせのように膨大な量の設問がある、長時間(2時間)のテストです。

最初の45分間は、ベラベラ、ベラベラと、止まることなく一方的に流れ続ける英語を聞かされ(リスニングセクション)、残りの75分は、パンフレット並みにぶ厚い英語の冊子をひたすら読まなければなりません(リーディングセクション)。

しかも、問題が恐ろしく意地悪で、根性悪で、ひねくれています(後述します)。「回答者に理解してもらおう」などという意図のかけらもなく、どす黒い悪意に満ち、「コミュニケーションテスト」と言いながら、私たち受験者とコミュニケーションする意図を最初から放棄している——。そんなテストです。

……とまあ、このような「江端の『悪意』フィルター」を介した説明では、訳が分からないと思いますので、TOEICについてちゃんと知りたければ[Wikipedia](#)を読んでください。

## TOEICは、誰が生み出したのか

---

「まあ、海外の組織が運営・管理しているテストなのだから、こういうものになっても仕方ないのかもしれないかなあ」と思って、今回TOEIC発足の歴史を調べてみました。そして、びっくりするような事実を知りました。

あなたは、どの国の人間が、このような悪魔のテストを考案したかご存じでしたか。

日本人です。

1970年代、日本企業の海外進出が急速に進むのに伴い、「国際的な理解を深めていかなければ、日本は将来立ち行かなくなる」という危機意識を持った日本人がいました。その方は、国際的な理解を深めるための、実効性のあるプログラムを開発しようと思い立ったのです。

海外との行き来がごく一般的になるであろう将来に、より多くの日本人が英語でのコミュニケーション能力を求められるようになるとの予想のもと、英語力を客観的に評価する手段とし

て考案したそうです\*1)。

\*1)「[TOEICプログラムの理念](#)」(TOEIC公式ホームページより)

その後、1977年に、米国ニュージャージー州プリンストンのETS(Educational Testing Service)との折衝を経てTOEICが誕生し、実施に至ります。この時の受験者は3000人でしたが、現在は230万人に上ります。これは、日本の年間海外出張者数260万人の、ほぼ100%に当たります([第3回:エンジニアが英語を放棄できない「重大で深刻な事情」](#))。



日本の就労人口と、年間当たりの短期海外出張者人数(クリックで拡大)

一方で、これは就労人口のわずか4%しか受験していないという見方もできますし、日本の海外旅行者数である年間1000万人の1/4とも取ることができます。

この状況を鑑みて、TOEICが当初の目的を達成しているのかどうか、私には分かりません。

いずれにしても、ここで私が申し上げたいことは1つです。

TOEICを発案し、並々ならぬ努力でその実現にこぎ着けてくださった日本人の方に対して、  
——いらんこと、しやがって  
と。

もし“TOJIC”があったなら……

---

さて、ここからは、このTOEICというものを実感してもらうために、1つの仮想世界を設定してお話します。

まず、ここで以下のイメージを描いてください。

あなたは、米国テキサス州の平凡な家庭に生まれた「トム(Tom)」と言う青年、あるいは「ナンシー(Nancy)」という女性です。

多くの北米人は、東京駅のプラットフォームで、「北京行きの新幹線の乗り場はどこですか？」

と質問するくらい、極東地域に興味がありません(実話)。トムとナンシーも例外ではないでしょう。

この度、勤めている会社が日本に支店を作ることになり、そのスタッフに抜てきされたトムまたはナンシーは、慌てて日本語の勉強を始めました。

日本語の勉強を初めて半年後、彼らは日本語の検定試験「Test of Japanese for International Communication (TOJIC)」を受験することになりました。なお、“TOJIC”は架空のテストで、元ネタがあります\*2)。

\*2)「[TOEIC必勝の法則:今のままでも150点はアップできる!!](#)」(晴山陽一 著、アスペクト)

さて、45分間のヒアリングテストが始まりました。なにやら、質問に対する正しい解答を選べ、と日本語で説明しているようです。

すると矢継ぎ早に日本語の問題が飛んできました。問題を一部抜粋したものを下記に示します。

写真を見て、正しい内容を説明している解答を(イ)から(ニ)から選びなさい。

- (イ)彼は書類にサインをしています
- (ロ)彼は履歴書を集めています
- (ハ)彼は椅子に座って上司と話をしています
- (ニ)彼は仕事に飽きています

質問を聞いて、正しい解答を(イ)から(ニ)から選びなさい。

あなたは今日いつ学校へ行きましたか。

- (イ)学校は5年前に設立されました
- (ロ)いいえ、今日学校は創立記念日でお休みでした
- (ハ)私は毎日7時に学校に行きます
- (ニ)はい、その通りです

次の会話を聞いて、適当な解答を(イ)から(ニ)から選びなさい。

「ねえ、君、どこから来たの」  
「どこだって良いでしょ。あなたには関係ないわ」  
「君の髪の毛って、さらさらだね」

- (イ)彼は美容師です
- (ロ)彼はけんかをしています
- (ハ)彼はナンパをしています
- (ニ)彼は耳が悪いです

次の説明文を聞いて、質問(1)から(3)を答えなさい。

-----

日本の製造業の会社では、失敗が多いと出世が早くなるそうである。

これは以前、ある会社に勤めている友人に聞いた話だが、あるソフトウェアエンジニアが顧客に納めるプログラムを書き間違えて、テスト運用中にそのシステムを全面停止させてしまったことがあるそうだ。

エンジニアとその同僚は、不眠不休でそのプログラムを書き直し、なんとかお客に納めることができた。その努力が上長に評価されて、そのエンジニアだけが仲間より早く出世することができたのだそうだ。

正確に動くプログラムを最初から書くことのできる人間の方が、優秀に決まっているのに、そういう人は上長の目から見ると目立たないため出世が遅れるらしい。

『システムの世界では人の能力を評価するのが難しいが、能力を持つエンジニアが報われないシステムを何とかしないと、日本は終わってしまう』と、その友人はこぼしていた。

-----

(1) 日本の製造業の社員は、どうすれば出世しますか。

- (イ) 不眠不休で働く
- (ロ) 友人に愚痴をこぼす
- (ハ) 目立つ
- (ニ) バグを出す

(2) 日本では誰が不眠不休で働きますか。

- (イ) 上司
- (ロ) 問題を起こした人
- (ハ) 誰でも
- (ニ) 出世が早い人

(3) この文章にふさわしい題目を選びなさい。

- (イ) 努力は天才に勝つ
- (ロ) 出世する秘訣(ひけつ)
- (ハ) システムエンジニアの評価方法
- (ニ) システムの安全な停止方法

トムとナンシーがこんなテストを受けてびっくりしなかったら、彼らは本当は日本人であるか、真面目に試験を受けていないかの、どちらかしかありません。

大体、「ナンパ」なんて言葉が外国人に分かるかどうか、そして最後の説明文などに至っては、だらだらと一気に、一方的にしゃべられてしまい、問題を解くときにはそのヒントすら手元には残っていない状態です。正直なところ、ネイティブな日本人でも解けるかどうか怪しいものです。

しかも、問題の内容は、日本人にしか分からない状況や専門家にしか分からない用語（例えば「バグ」が未定義で使われている）が山ほどあり、その上、日本人特有の性格が分かっていると、問題の設定となっている状況の雰囲気すら理解できないでしょう。

このテスト(TOJIC)の、いったいどこに、日本語のコミュニケーション能力を測る指標となる要素があるのでしょうか。

今回、この問題(TOJIC)を家族で解いてみたのですが、問題作成者であるこの私が誤答しました(嫁さんの解説を聞いて『参りました』と、頭を下げました)。

このテストに完璧に解答できる外国人を、私たち日本人は「素晴らしい」と思いますか？ 私なら、「こんなテスト(TOJIC)でハイスコアを目指すような時間があるなら、別の勉強(日本語以外の語学など)でもしていたら？」とアドバイスします。

## TOEICは、「いじめ」である

---

要するに、TOEICというテストの位置付けは、「不必要にオーバースペックな北米圏英語への隷属」、もっと単純に言うと「いじめ」なのです。

多くの日本人が、なぜこのような「いじめ」を好きこのんで受けに行くのか、私には理解不能です。私のように業務命令で受験させられているか、今の若い人であれば入社条件になっているのかもしれませんが。

大体、このようなテストのスコアが高いということは、自分自身が『ああああっ! もっとお! もっとおいじめてえ〜!!』と叫ぶマゾヒスティックな変態的性癖嗜好(しこう)者であることを、満天下に向けて公表しているようにも思えるのです。

□

エンジニア視点で冷静に考えてみれば、TOEICスコアの“良し/あし”は、英語を使う生活の“楽/不便”におおむね連動しているのは事実でしょう。

あの、悪魔のようなTOEICのリスニングセクションを完璧に聞き取れる人なら、同時に10人の日本人と会話できるスキルを有しているに違いありません。これはもう、「努力」の範疇(はんちゅう)を超える話です。



画像はイメージです

「英語に愛されない」ということは、「TOEICからコケにされる」ということと同義ですが、もう、このようなことに腹を立てても仕方ありません。

そもそも、私には「TOEICにコケにされる」程度の能力しかないからこそ、この連載で紹介した、多くの姑息(こそく)な「コミュニケーション『アシスト』手段」を生み出してきた、というのもまた事実なのであります。

□

今、あなたの前には、2つの道があります。

(1) 真面目に英語を勉強してTOEICのスコアを上げ、基本と正道の精神に乗っ取り、英語のコミュニケーションスキルを上げるために、たくさんのお金と時間と努力を注ぎ込む。ただし、どれだけお金と時間をかけても、実際にスキルが上がるかどうかは、一切保証されていません。

(2) 「英語に愛されない」ことを認めて、私が提唱し続けてきた姑息な「コミュニケーション『アシスト』手段」による場当たり対応で、エンジニア人生の延命を図る。

どちらを選ぶのも、あなたの自由です。

ただ、私の場合は、私の2年間の米国赴任のコミュニケーション力を真正面から否定した「TOEIC」とは、永久に和解する予定がないという「事実」があるだけです。

□

さて、今回は、客観性を排して、悪意と憎悪を込めて「TOEIC批判」……もとい、「TOEIC非難」を行いました。TOEICを否定する以上、代替手段を提示するのが正しいエンジニアの姿であるべきです。

後編では、私が自信を持って世界に向けて提唱するテスト

「TOPIC (Test of PLAYING for International Communication) :  
国際コミュニケーション“演劇”テスト」

について、その内容をお話したいと思います。



本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



## Profile

江端智一(えばたともち) [@Tomoichi Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

## 関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright © 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.

